COM TALK

安 めぐみ

仕事で海外に出る機会も多いのですが、その中でも数年前、テレビ番組の企画で滞在したモンゴル共和国では、強烈なカルチャーショックを受けました。

首都ウランバートルから国内線に乗り換えて地方都市へ。そこから更にランドクルーザーで一日半走って、着いたところは、ただ広いだけの草原でした。そこにポツンと張ってあるモンゴル式テント住居のゲルが、私がお世話になったご夫婦のお住まいでした。

到着した夜は、さすがに心細かったですね。言葉も通じませんし。でも、夜空には、ひとつひとつが凄く大きくて、今にも落ちてきそうな満点の星が輝いていました。そこでは、「隣のゲルまでちょっと行ってくる」という〝隣り〟が二キロ先なのです。

遊牧民の日常は一見、草原に取り残されたような生活ですが、翌日には知らない人たちが何人か現れ、聞いてみると「馬でやって来た」と。遠いようでいてその気になったらいつでも来られる。バス停や駅があるわけでもないので、その現れ方が魔法を使って突然出てきたみたいで面白かったです。

困ったのは食事でした。「歓迎の御馳走をする」といって羊の焼肉料理を出してくれたのですが、これが凄くリアルで。その羊は、さっきまで他の羊たちとひとかたまりになって草を食べていた羊なのです。調理も、獲物を横取りしようと襲ってくる鷹を追い払いながらの作業です。私もお手伝いしましたが、強烈な体験でした。ジンギスカン料理は大好きですが、この時ばかりは食べられませんでした。

羊料理は辛い思い出ですが、大自然と素朴なモンゴルの人たちは、忘れられない思い出です。

Megumi YASU

■プロフィール
やす･めぐみ　東京都出身

タレントとして情報番組、バラエティー番組などで人気を集める。2006年には「結婚したいと思うタレントランキング」で1位に。CMやドラマのほか、NHK教育TV「サイエンスZERO」ではナビゲーター役として出演中。

COM Vol.23

CONTENTS

COM TALK　安 めぐみ　2

Front Line 建築家インタビュー　伊東 豊雄　3

Arrangement 納入事例　赤坂タワーレジデンス「トップ オブ ザ ヒル」　8

新宿ピカデリー　12

野村不動産札幌ビル　10

Topics トピックス　多新しい時代のニーズに応える日精のユニバーサルパーキング　14

Information COMプレゼント　16

人間は木の上か、洞窟で暮らしていた。いろんな建築家と話し合っても、みんなそこに行き当たります。

伊東 豊雄 *Toyo ITO*

20世紀的な機能主義の建築は人間を不自由にしているのでは？
もっと自由でフレキシブルに、人間の五感を取り戻す建築とは、
周囲の環境と対話する、より自然に近いものであるべきだ。

より自由なスペースを目指した図書館「せんだいメディアテーク」の試み

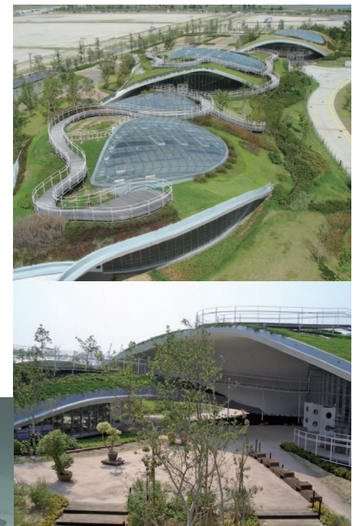
せんだいメディアテークは私の人生の最大のイベントとなりました。建築家として初めて世のためになったというか、いろんな人達が建築というものが楽しいものだとわかってくれたような気がします。それまでも、いくつか建築をやってきており、ユニークであるとか、キレイだという評価はありましたが、建築というのはこんなに楽しく、いいものだとわかってくれたのが、私にとって勇気を与えてくれました。

別の言い方をすれば、建築は人間を不自由にしているような気がして、建築など無くて済むなら、無いほうがいいんだと思っているところがあるんです。でも、作らねばならないなら、どんな建築が人々に元気を与えられるのかと、ずっと考えていました。ですから、従来の建築よりも「自由」なものになったことで、人々に元気を与えられることができるとわかったことが収穫でしょうか。

せんだいメディアテーク／伊東豊雄建築設計事務所

せんだいメディアテークは、図書館を中心にギャラリーやオーディオ・ビジュアルのスペースがあり、一階は屋内化された広場のスペースがある施設です。これまで図書館というと、机に座って静かに本を読む場所という印象がありましたが、実際には、いろんな本の読み方があるわけで、寝転がって本を読んだっていいじゃないかと。自然の中、公園の中だと、人は好きな場所で本を読んだり、人と話したりできるのに、図書館という建築に入った途端に、こうしなさい、ああしなさいとコントロールされます。それは不自由なので、もっと自由にしようと思いました。一階の広場のスペースではコンサートなども行われ、その音は2階、3階にも聞こえるのですが、一度、公園のようなスペースを作ってしまえば、人はあまり音を気にしない、本を読んでいる近くを子供が走っていても、そんなに気にならない。

福岡アイランドシティ中央公園中核施設
ぐりんぐりん／ナガノコンサルタント



福岡アイランドシティ中央公園中核施設 ぐりんぐりん／伊東豊雄建築設計事務所

人間というのは環境の作られ方で「うるさい」と思ったり、逆に、音は聞こえていても本を読めるようになるものなのだと、初めて私もわかりました。こうした試みはヨーロッパなど、海外からは非常に評価を受けましたが、日本では他の自治体など、数多く視察には来るのですが、相変わらず慣習的なものを造り続けていますね。

もはや20世紀の機能主義的な建築では多様化した人間の行動に応えられない

20世紀の建築は、「機能」を重要だと考えます。住宅を例に取るとわかりやすいのですが、人間は家の中でいろんなことをしています。しかし、寝る場所、食べる場所といくつかの機能に分け、寝る場所はこういう場所がいい、食べる場所はこういう場所が一番いいと決めてしまった。しかし、寝ころびながら、本を読みながら食べたり、実際にはいろんなことをやっているわけで、人間の行動というのは簡単に切り分けられるものではない。しかし、それぞれに最もふさわしい空間があると、明確な関係に置き換えてしまったのが、20世紀の機能主義的な建築です。

VivoCity／伊東豊雄建築設計事務所

ところが、世の中が今のように複雑になり、多様になると、子供は自分の部屋にテレビがありますし、昔のようにリビングやダイニングに家族が集まり「さあ、ご飯を食べよう」という家族も少ないわけです。もう「機能」では、建築をうまく構成できなくなってきている。もっと自然の中のように、いろんな場所が家の中に用意されていて、今日は天気が良いのでここで食べよう、寒いときはこっちでと、そこで何をしたっていいじゃないか、というように変わってきている気がするのですね。それを、どのように建築として組み立てていくことができるかを、せんだいメディアテークでは、ある程度やったつもりで、図書館は2階、3階、4階にあるのですが、本を持って1階に行こうが、6階に行こうがいいじゃないかということです。もっと複雑で、多様で、曖昧な建築にしたほうが、自由度も上がるし、面白いのではないかと思っているのです。

私はよく木を見習えというのですが、木というのは、単純な枝分かれをしていくというルールで成長していくのですが、同じケヤキの木も百本あったら百本違うと。何故かというと、太陽はどちら側から照るかとか、風はどちらから吹くかとか、隣の木はどちら側にあるかとか、環境との相対的な関係で木は成長していくからです。今まで建築は全部一度に決めて、その先は何も動かさないものだったのですが、もっと周りの環境との関係を取りながら、フレキシブルに決めることが必要だと思います。本当は、周りとの関係が一番大事なのですが、20世紀型は環境と関係をとれないことでエネルギーを無駄遣いしています。周りの環境と切れた人工的な箱を造り、そこにソーラーバッテリーを付ける、断熱を良くするようなことばかりで、それは完璧に本末転倒だなと考えています。寒いときは寒いが、日だまりは暖かいわけです。ところが、建物のどこへいっても暖かいという20世紀型が、どれほどエネルギーを無駄にしているかについて、そろそろ気づくべきでしょうね。

バルセロナ見本市 グランヴィア会場拡張計画／伊東豊雄建築設計事務所

直交するグリッドから開放されることで より自然に近い建築が可能になる

瞑想の森 市営斎場／伊東豊雄建築設計事務所

それは形の問題だけではないのですが、もう少し自然の状態に建築を近づけていけないだろうかと。直交するグリッドというか、建築はみんな直角でできているのですが、不思議なもので、それを少し変えるだけで、人間はすごくリラックスします。たとえば展覧会などで床をうねらせてみると、途端に子供が走り出し、普段は静かな展覧会が子供が走り回る場所になる。

本来、人間も動物なので、自然の中では直角なものに出会うことはなかったのです。

シンガポールでは、ショッピングセンターの屋上に曲面を配し、水を取り込んだのですが、それまで冷房のない屋外など暑くて居られないと言っていたシンガポールの人たちが、子供が着の身着のままで水の中に入っていくので、親たちもということで、外で楽しんでくれるようになりました。これを見て、従来はこうでなければと思われていたことは、意外と簡単に崩れ去るのだなとわかりました。

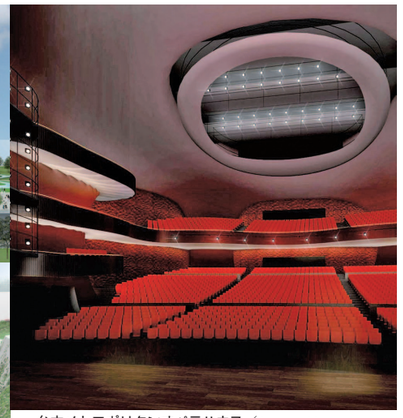
また、これまでは建物で少し直角を崩すとか、曲面を取り入れるということは技術的に大変で、施工も追いついていかなかったのですが、せんだい以降、コンピュータ解析の進化と、基礎的な技術に優れた日本の職人さんの施工技術とチャレンジしようとする意欲により、そんなにコストアップしないで、自然物に近い建築が可能になってきました。

多摩美術大学図書館（八王子キャンバス）／石黒写真研究所

もともと人間が暮らしていた場所から 建築を自然に近いものに変えていく

近代主義の建築は、直交するグリッドを積み重ねて建物を造ってきましたが、それを外していくと、どういうことが起こるか。近代から逆に建築をさかのぼると、人間はもともと木の上か、洞窟にもぐって暮らしていたかの2つしかない。いろんな建築家と話し合っても、みんなそこに行き当たります。20世紀の建築とは、触覚、嗅覚などの五感をあまり働かさない空間です。そこで、五感を働かせるような建築を求めると、不思議とみんな木の上に居るような建築か、洞窟になります。

現在進行中のプロジェクトで最も大事な建築は、台湾で設計している台中メトロポリタン・オペラハウスです。縦横に穴がつながったアリの巣のようなトンネル状の空間で、全体が洞窟のような建築です。外の空間がそのまま中に入り込み、いたるところが道と広場になっているのですが、オペラやコンサートを道や広場でやっている感覚のホールを造りたいと思っています。そこで、現実にはなかなか難しいのですが、人間が寝転がってオペラを観るような楽しさが出せないかと思っています。ホールとはこういうものと決めてかかるのではなく、どうすれば自然に近づけるのかが最大のテーマですね。



台中メトロポリタンオペラハウス／ kuramochi + oguma

パーキングが建築と一体化することで 新たな可能性が生まれる

高層のオフィスビルなどの高層階まで直接、車でアクセスできないかと考えたことがあります。たとえば、30階までエレベーターで、車でやってきてその階に駐車しておけないかと。VIPなどが下まで行かずに、その場所で車に乗って、そのまま誰にも会わずに外に行けるのではと思いました。

パーキングだけが建築と隔離された場所でなく、もっと建築と一体になるという動きが、必ず出てくると思います。パーキングに車が並んでいる風景というのは面白いと思うのです。それをもっと風景になるような造り方ができないかと。タワーパーキングなども景観を壊すとみんな思い込んでいますが、実際に高層ビルに車が並んで動いてる風景が建築に組み込まれたなら、これは面白いと思います。

都市の空間は平面的な移動であって、それが建築という単位に変わった途端に別のモノに変わるのではなく、垂直方向も水平と同じように都市空間なのだと思います。今はその垂直の交通が都市をつまらなくしていると思いますね。パーキングは地下の暗い場所の密室ということになっていますが、誰かが新しい試みを始めれば、一挙に変わっていくのではないでしょうか。タワーパーキングもコストの問題もあるでしょうが、壁面緑化などを行うだけで、かなり変わってくると思います。

P R O F I L E

伊東豊雄 Toyo ITO

1941年京城(現ソウル)市生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。菊竹清訓建築設計事務所勤務を経て(株)アーバンロボット(URBOT)設立し代表取締役に。1979年事務所名を(株)伊東豊雄建築設計事務所に改称。1991年コロンビア大学建築学部客員教授。1998年～2005年くまもとアートポリス・バイスコミッショナー。2000年、九州大学工学部非常勤講師。2002年、京都大学工学部非常勤講師。2002年多摩美術大学美術学部客員教授。2005年、くまもとアートポリス・コミッショナー。

主な受賞履歴

1984年に第3回日本建築家協会新人賞を受賞。1986年、昭和60年度日本建築学会作品賞受賞。1990年に第3回村野藤吾賞受賞。1992年に第33回毎日芸術賞受賞。1997年に第8回ブルガリア・ソフィア・トリエンナーレグランプリ受賞。1998年に1997年度芸術選奨文部大臣賞受賞。1998年に第55回日本芸術院賞受賞。2000年に国際建築アカデミー（IAA）アカデミシアン賞、アメリカ芸術文化アカデミー アーノルド・W・ブルーナー賞受賞。2001年にせんだいメディアテークが2001年度グッドデザイン大賞受賞。2002年にせんだいメディアテークが第8回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築点 金獅子賞 World Architecture Awards Best Building in East Asia受賞。2003年にせんだいメディアテークが2003年度日本建築学会賞作品賞受賞。2004年、金のコンパス賞。2006年、王立英国建築家協会(RIBA)ゴールドメダル受賞。